

教行信証における涅槃經の研究(続々)

巖城孝憲

要旨

前々回の最初に掲げた要旨の通りであるが、その続きとして今回扱った部分においては、阿闍世の「無根の信」の自覚に至るまでの教説、これは、「信巻」における親鸞聖人の非常に厳密な「唯除五逆誹謗正法」の考察であり、『涅槃經』が、『無量寿經』の真実を証明する一段であると前回述べたことである。『涅槃經』にはそののち、『教行信証』「真仏土巻」に引用される常・楽・我・淨の四法の教説が語られる。

序

『涅槃經』の本文の流れに沿って、宗祖の『教行信証』の引文を検討しているが、今回は、先回の(11)の残り後半部分(11)bと、(12)－(16)までを検討したい。

(11)b 信巻	親聖全 168 頁	大正蔵 482 頁 b	真宗聖典 261 頁	6 行目
(12) 真仏土	236 頁	503 頁 a	305 頁(科文	16)
(13) //	238 頁	503 頁 a	306 頁(//	17)
(14) 化身土巻	305 頁	511 頁 b	353 頁(//	93)
(15) 真仏土巻	239 頁	514 頁 c	307 頁(//	18)
(16) 行巻	77 頁	515 頁 b	197 頁(//	115)

難読の語には、[ルビ]のように、読み方を示した箇所がある。また、先回示したと同様に、『教行信証』への引文部分はアンダーラインにて示し、その部分の訓読は、『定本親鸞聖人全集』(法蔵館)により、宗祖の読み方(坂東本)に従っている。のべ書きに際しては、次の二書を参考にさせていただいているのは従前同様である。

国訳一切経印度撰述部 涅槃部一、二 大東出版社 1987(昭和 62)年
新国訳大蔵経インド撰述部 涅槃部 1, 2, 3 大蔵出版社 2008-9(平成 20-21)年

(11)b

(中略 481b 27～482c23)

(482b24)爾の時、大王、即ち、一臣、名を吉祥と曰ふを命にて、之に告げて言はく、「大臣、當に知るべし。吾、今、佛世尊の所に往かんと欲す。速かに供養所須の具を辦ぜよ。」臣の言さく、「大王、善い哉、善い哉、所須の供具、一切悉く有り。」阿闍世王、其の夫人と、嚴駕[ゴンガ]の車乗一萬二千、殊壯[シソウ]の大象、其の數五萬、一一の象の上に、各三人を載せ、幡蓋を齎持す。花香・伎樂・種種の供具、備足せざる無し。導從[ドウジュウ]馬騎[メキ]、十八萬有り。摩伽陀[マカダ]國の有らゆる人民、尋[ツ]いで王に従ふ者、其の數五十八萬を足満す。爾の時に拘尸那[クシナ]城の有らゆる大衆、十二由旬に満つるが、悉く皆遙かに阿闍世王の、其の眷屬と、路を尋ねて來るを見る。

爾の時に、佛、諸の大衆に告げて言わく、「一切衆生、阿耨多羅三藐三菩提に近づく因縁の爲には、善友を先とするには无[シ]かず^[註1]。何を以つての故に。阿闍世王、若し耆婆の語に隨順せずは、來月の七日、必定して命終して阿鼻獄に墮せむ。是の故に、善友に若[シ]くことなかれ。阿闍世王、復た前路において、舍婆提に聞く。「毘流離王、船に乗じて、海邊に入りて、災して死ぬ^[註2]。瞿伽離[クカリ]比丘、生身に、地に入りて阿鼻獄に至れり。須那利多[シュナセッタ]は、種種の惡を作りしかども、佛所に到りて、衆罪消滅しぬ^[註3]と。是の語を聞き已りて、耆婆に語りて言はく、「吾、今是の如きの二つの語[コトバ]を聞くと雖も、猶未だ審[アキラカ]ならず。定んで、汝、來れり。耆婆、吾、汝と同じく一象に載らむと欲う^[註4]。設ひ我、當に阿鼻地獄に入るべくとも、冀[ネガ]はくは、汝、投持して^[註5]、我をして墮さしめざれと。何を以つての故に。吾、昔曾つて聞きき、「得道の人は地獄に入らず」と。

爾の時、佛、諸の大衆に告げて言はく、「阿闍世王、猶疑心有り。我、今當に爲に決定心を作すべし。」爾の時、會中に一菩薩有り。持一切と名く。佛に白して言さく、「世尊、佛の先説の如く、一切諸法に、皆定相無し。所謂色に定相無く、乃至涅槃にも亦定相無し。如來、今、云何ぞ而も阿闍世の爲に決定心を作すと云ふ。」佛の言はく、「善い哉、善い哉、善男子、我、今定んで阿闍世王の爲に決定心を作す。何を以ての故に。若し王の疑心にして破壊すべくば、當に知るべし、諸法に定相有ること無きを。是の故に、我、阿闍世王の爲に、決定心を作す。當に知るべし、是の心無決定爲るを。善男子、若し彼の王の心にして、是れ決定ならば、王の逆罪、云何ぞ壞すべき。定相無きを以て、其の罪壞すべし。是の故に、我、阿闍世王の爲に決定心を作す。

爾の時に大王、即ち娑羅雙樹の間に到りて、佛所に至り、仰いで如來の三十二相・八十種好の、猶し微妙眞金の山の如くなるを瞻[ミ]る。爾の時に世尊、八種の聲を出して告げて「大王」と言ふ。

(中略 482c30～483b23)

(483b23)見縛すべしと雖も、其の性住せず。不住を以ての故に、見る事得べからず、捉持すべからず、稱量すべからず、牽縛すべからず。色相是の如し、云何ぞ殺すべけん。若し色、是れ父にして、殺すべく、害すべく、罪報を獲ば、餘の九は非なるべし。若し九、非ならば、則ち罪無かるべし。大王、色に三種有り。過去・未來・現在なり。過去・現在は則ち害すべからず。何を以ての故に。過去は過去するが故に、現在は念念に滅するが故に。未來を遮するが故に、之を名けて殺と爲す。是の如く一色、或は可殺有り。或は不可殺あり。殺・不殺有れば、色は則ち不定なり。若し色不定ならば、殺も亦不定なり。殺不定の故に、報も亦不定なり。云何ぞ説きて定んで地獄に入ると言ふ。大王、一切衆生の所作の罪業に、凡そ二種有り。一には輕、二には重なり。若し、心と口とに作るは、則ち名けて輕と爲す、身と口と心の作るは、則ち名けて重と爲す。大王、心に念[オモ]ひ口に説ひて、身に作さざれば、得る所の報、輕なり。大王、昔日[ムカシ]、口に「殺せよ」と勅せず、但足を削れと言へりき。大王、若し侍臣に勅せましかば、立ちどころに王の首を斬らまし。坐の時に乃ち斬るとも、猶罪を得じ^[註6]。況や王、勅せず、云何ぞ罪を得ん。王、若し罪を得ば、諸佛世尊も亦、應に罪を得たまふべし。何を以ての故に。汝が父先王頻婆娑羅、常に諸佛に於て、諸の善根を種へたりき。是の故に、今日[キョウ]王位に居ることを得たり。諸佛、若し其の供養を受けたまはざらましかば、則ち王爲[タ]らざらまし。若し王爲[タ]らざらましかば、汝、則ち國の爲に害を生ずることを得ざらましと。若し汝、父を殺して當に罪有るべくば、我等諸佛も亦、應に罪有[マシマ]すべし。若し諸佛世尊、罪を得たまふこと无くば、汝獨り、云何ぞ而も罪を得んや。

大王、頻婆娑羅、往[ムカシ]、惡心有りて、毘富羅山に於て、遊行して鹿を射獵[シャリョウ]して、墮野に周遍しき。悉く得る所無し。唯、一の仙の五通具足せるを見る。見已りて、即ち、瞋恚惡心を生じき。「我、今遊獵す。所以[コノユエ]に、正しく坐すことを得ず。此の人、驅[カ]りて逐に去ら令む^[註7]。」即ち左右に勅して、之を殺せ令む。其の人、終に臨んで瞋[イカ]て惡心を生ず。神通を退失して、誓言を作さく、「我、實に辜無し。汝、心・口を以て、横[ホシイママ]に戮害[リクガイ]を加す。我、來世に於て、亦當に是の如く、還て心・口を以て、汝を害すべし」と。時に王、聞き已りて、即ち悔心を生じて、死屍を供養しき。先王、是の如く尚、輕く受くことを得て、地獄に墮ちず^[註8]。況や、王、爾らずして、而も當に地獄の果報を受くべけんや。先王自ら作て、還て自ら之を受く。云何ぞ、王をして、殺罪を得しめん。王の言ふ所の如し、父の王、辜無くば、大王、云何ぞ、失[トガ]無きに罪有りと言はば、則ち罪報有らん^[註9]。惡業无くば、則ち罪報无けん。汝が父先王、若し辜[コ]罪無くば、云何ぞ報有らん。頻婆娑羅、現世の中に於て亦、善果及以[オヨビ]惡果を得たり。是の故に、先王亦復不定なり。不定を以ての故に、殺も亦不定なり。殺不定は、云何してか定んで地獄に入ると言はん」と。

大王、衆生の狂惑に凡そ四種有り。一には貪狂、二には藥狂、三には呪狂、四には本業緣狂なり。大王、我が弟子の中に、是の四狂有り。多く惡を作すと雖も、我、終に是の人戒を犯せりと記せず。是の人の所作、三惡に至らず。若し還つて心を得ば、亦犯と言はず。王、本、國を貪して此れ父の王を逆害す。貪狂の心をもつて、與[タメ]に作[ナ]せり。云何ぞ罪を得ん。大王、人、耽醉[タンスイ]して、其の母を逆害せん、既に醒寤[ショウゴ]し已りて、心に悔恨を生ぜんが如し。當に知るべし、是の業、亦報を得じ。王、今、貪醉せり。本心の作せるに非ず。若し本心に非ずば、云何ぞ罪を得んや。大王、譬へば幻師の、四衢[ク]道の頭[ホトリ]にして、種種の男女・象馬・瓔珞・衣服を幻作するが如し。愚癡の人は、謂[オモウ]て眞實と爲す。有智の人は、眞に非ずと知れり、殺も亦、是の如し。凡夫は、實と謂へり。諸佛世尊は、其れ眞に非ずと知ろしめせり。大王、譬へば山谷の、響[ヒビキ]の聲の如し。愚癡の人は、之を實の聲と謂へり。有智の人は、其れ眞に非ずと知れり。殺も亦、是の如し。凡夫は實と謂へり。諸佛世尊は、其れ眞に非ずと知ろしめせり。大王、人の怨有るが、詐り來りて親附す

るが如し。愚癡の人は、謂[オモ]ふて實親と爲し、智者は了達して乃ち虚詐なるを知るが如し。殺も亦是の如し。凡夫は實と謂[オモ]ふ。諸佛世尊は、其れ眞に非ずと知ろしめせり。大王、人、鏡を執りて自ら面像を見るが如し。愚癡の人は、謂ふて眞の面と爲す。智者は了達して、其れ眞に非ずと知れり。殺も亦是の如し。凡夫は實と謂ふ。諸佛世尊は、其れ眞に非ずと知ろしめせり。大王、熱の時の炎の如し。愚癡の人は、之は是、水と謂はむ。智者は了達して、其れ水に非ずと知らむ。殺も亦是の如し。凡夫は實と謂はむ。諸佛世尊は、其れ眞に非ずと知ろしめせり。大王、乾闥婆城の如し。愚癡の人は、謂ふて眞實と爲す。智者は了達して其れ眞に非ずと知れり。殺も亦是の如し。凡夫は實と謂へり。諸佛世尊は、其れ眞に非ずと了知せしめたまへり。大王、人の、夢の中に五欲の樂を受くるが如し。愚癡の人は、之を謂[オモ]ふて實と爲す。智者は了達して其れ眞に非ずと知れり。殺も亦是の如し。凡夫は實と謂へり。諸佛世尊は、其れ眞に非ずと知ろしめせり。大王、殺法・殺業・殺者・殺果及以[オヨビ]解脱、我、皆之を了[サト]れり。則ち罪有ること無けむ。王、殺を知ると雖も、云何ぞ罪有らむや。大王、譬へば人主有りて酒を典[ツカ]さどれりと知れども、如[モシ]、其れ飲まざれば、則ち亦酔はざるが如し。復、火と知ると雖も、燒然せず。王も亦是の如し。復、殺を知ると雖も、云何ぞ罪有らん。大王、諸の衆生有て、日の出[イズ]る時に於て、種種の罪を作る。月の出る時に於て、復劫盜を行ぜむ。日月出でざるに、即ち罪を作らず。日月に因て、其れ罪を作ら令むと雖も、然に此の日月、實に罪を得ず。殺も亦是の如し。復、王に因ると雖も、王は實に罪無し。

大王、王の宮中、常に羊を屠るを勅するに、心、初[スベ]て懼[オソレ]無きが如し。云何ぞ、父に於て獨り懼心[クシン]を生ずる。復、人畜は、尊卑差別すと雖も、命を寶として死を畏るは、二つ俱に異なること無し。何が故ぞ、羊に於て心軽くして懼[オソレ]無く、父先王に於て重き憂苦を生ずる。大王、世間の人は、是愛の僮僕にして自在を得ず。愛に使はれて殺害を行ず。設ひ果報有るも、乃ち是愛の罪なり。王は自在ならず、當に何の咎[トガ]か有るべき。大王、譬へば涅槃は、非有非無にして、亦是有なるが如し。殺も亦是の如し。非有非无にして、亦是有なりと雖も、慚愧の人は、則ち非有と爲す。无慚愧の者は、則ち非無と爲す。果報を受くる者、之を名けて有と爲す。空見の人は、則ち非有と爲す。有見の人は、則ち非无有と爲す。有見の者は、亦名けて有と爲す。何を以ての故に。有有見の者は、果報を得るが故に。無有見の者は、則ち果報無し。常見の人は、則ち非有と爲す。无常見の者は、則ち非无と爲す。常常見の者は、无と爲[ス]ることを得ず。何を以ての故に。常常見の者は、惡業果有るが故に、是の故に、常常見の者は、无と爲[ス]ることを得ず。是の義を以ての故に、非有非无にして、亦是有なりと雖も、大王、夫れ衆生は、出入の息に名づく。出入の息を斷[タ]つ故に、名づけて殺と爲す。諸佛、俗に隨ひて、亦説きて殺と爲す。

大王、色は是無常なり。色の因縁も亦是無常なり。無常の因従り生ずる色は、云何ぞ常ならん。乃至、識は無常なり、識の因縁も亦是無常なり。無常の因従り生ずる識は、云何ぞ常ならん。無常を以ての故に苦なり。苦を以ての故に空なり。空を以ての故に無我なり。若しは無常・苦・空・無我ならば、何の殺す所とか爲ん。無常を殺さば常涅槃を得ん。苦を殺さば樂を得、空を殺さば實を得、無我を殺さば眞我を得ん。大王、若し無常・苦・空・無我を殺さば、則ち我と同じからん。我も亦無常・苦・空・無我を殺すに、地獄に入らず。汝、云何ぞ入らん。」

爾の時に阿闍世王、佛の所説の如く、色を觀じ、乃至、識を觀ず。是の觀を作し已りて、即ち佛に白して言さく、「世尊、我、今初めて色はは無常、乃至、識は無常なるを知る。我、本、若し能く是の如く知らば、則ち罪を作らじ。世尊、我、昔、曾て聞く、「諸佛世尊は、常に衆生の爲に、父母と作[ナ]る」と。是の語を聞くと雖も、猶未だ審定せず。今、則ち定んで知んぬ。世尊、我、亦曾て聞く、「須彌山王は、四寶の所成、所謂金・銀・琉璃・頗梨なり。若し衆鳥有れば、集る所の處に隨ひて、則ち其の色を同じうす」と。是の言を聞くと雖も、亦審定せず。我、今、佛、須彌山に來すすれば、則ち與[トモ]に色を同じうす。與に色を同じうすとは、則ち諸法の無常・苦・空・無我を知るなり。世尊、我、世間を見るに、伊蘭子従り伊蘭樹を生ず。伊蘭より栴檀樹を生ずるをば見ず。我、今、始めて伊蘭子従り栴檀樹を生ずるを見る。伊蘭子は、我が身、是也。栴檀樹は、即ち是、我が心、无根信也。无根は、我、初めて、如來を恭敬せむことを知らず。法・僧を信ぜず。是を无根と名づく。世尊、我、若し如來世尊に遇[モウア]はずば、當に无量阿僧祇劫に於て、大地獄に在りて、无量の苦を受くべし。我、今、佛を見たてまつる。是、佛を見たてまつり得る所の功德を以て、衆生の煩惱惡心を破壊せしむ^[註10]と。

佛の言はく、「大王、善い哉、善い哉、我、今汝必ず能く衆生の惡心を破壊することを知れり。」世尊、若し我、審[アキラ]かに能く衆生の諸の惡心を破壊せば、我常に阿鼻地獄に在りて、无量劫の中に、諸の衆生の爲に、苦

惱を受け使む。以て苦と爲[セ]ず。」

爾の時に、摩伽陀國の無量の人民、悉く阿耨多羅三藐三菩提心を發しき。是の如き等の無量の人民、大心を發すを以ての故に、阿闍世王所有の重罪、即ち微薄なることを得しむ。王及夫人・後宮・姪女、悉く皆同じく阿耨多羅三藐三菩提心を發しき。

爾の時に、阿闍世王、耆婆に語りて言[イマハ]く、「耆婆、我、今、未だ死せざるに、已に天身を得たり。短命を捨てて長命を得、無常の身を捨てて常身を得、諸の衆生をして阿耨多羅三藐三菩提心を發せしむ。即ち是、天身長命常身にして、即ち是、一切諸佛の弟子、是の語を説き已りて、即ち種種の寶幢・幡蓋・香花・瓔珞・微妙伎樂を以て、佛に供養し、復偈頌を以て讚歎して言さく。

實語甚だ微妙なり 善巧句義において

甚深祕密藏なり 衆の爲の故に

所有廣博の言を顯示す 衆の爲の故に略して説かく

是の如きの言を具足して 善く衆生を能療す

若し諸の衆生有りて 是の語を聞くことを得る者は

若しは信及び不信 定んで佛説を知らむ

諸佛は常に軟語をもて 衆の爲の故に麁を説きたまふ

麁語も及び軟語 皆第一義に歸せむ

是の故に我今者[イマ] 世尊に歸依したてまつる

如來の語は一味なること 猶し大海の水の如し

是を第一諦と名づく 故に無無義の語にして

如來今説きたまふ所の 種種無量の法

男女大小聞きて 同じく第一義を獲しめむ

无因亦无果なり 无生亦无滅なり

是を大涅槃と名づく 聞く者諸結を破す

如來一切の爲に 常に慈父母と作りたまへり

當に知るべし 諸の衆生は皆是如來の子なり

世尊大慈悲は 衆の爲に苦行を修したまふこと

人の鬼魅に著[クルワ]されて 狂亂して作す所多きが如し

我今佛を見たまつることを得たり 得る所の三業の善

願はくは此の功德を以て 无上道に迴向せむ

我今供養する所の 佛法及衆僧

願はくは此の功德を以て 三寶常に世に在[マシマ]さむ

我今當に得べき所の 種種の諸の功德

願はくは此を以て 衆生の四種の魔を破壊せむ

我惡知識に遇ふて 三世の罪を造作せり

今佛前に於[シ]て悔ゆ 願はくは後に更[マタ]造ること莫からむ

願はくは諸の衆生等[ヒト]しく 悉く菩提心を發せしむ

心を繋けて常に 十方一切佛を思念せむ

復願はくは諸の衆生 永く諸の煩惱を破し

了了に佛性を見ること 妙徳の猶如[ゴトク]して等からむ

爾の時に世尊、阿闍世王を讚[ホ]めたまはく。「善い哉、善い哉、若し人有て、能く菩提心を發せむ。當に知るべし。是の人は則ち、諸佛大衆を莊嚴すと爲す。大王、汝、昔、已に毘婆尸佛のみもとに於[シ]て、初めて、阿耨多羅三藐三菩提心を發しき。是従り已來[コノカタ]、我が出世に至るまで、其の中間に於て、未だ曾て復地獄に墮して苦を受けず。大王、當に知るべし、菩提の心は、乃[イマ]し是の如き無量の果報有り。大王、今従り已往に、常に當に菩提の心を勤修すべし。何を以ての故に。是の因縁に従[シタガヒ]て、當に無量の惡を消滅することを得べきが故なり。」爾の時に、阿闍世王、及び摩伽陀、國の人民舉[コゾ]て、座従りして起ち、佛を繞ること三匝して、辭退して宮に還りにき。天行品とは雜花に説くが如し。

大般涅槃經嬰兒行品第九

「善男子、云何が嬰兒行[ヨウニギョウ]と名くる。善男子、起・住し、來・去し、語言すること能はざる、是を嬰兒[ヨウニ]と名く。如來も亦爾なり。不能起とは、如來、終に諸の法相を起さざるなり。不能住とは、如來、一切の諸法に著せざるなり。不能來とは、如來の身行に動搖有ること無きなり。不能去とは、如來、已に大般涅槃に到るなり。不能語とは、如來、一切衆生の爲に諸法を演説すと雖、實は所説無きなり。何を以ての故に。説く所有るを、有爲法と名く。

(12)

(503a08)六者、自在を以ての故に、一切法を得。如來の心、亦得想無し。何を以ての故に。所得無にが故に。若し是有なら者、名づけて得と爲す可きも、實に所有無し。云何ぞ得と名づけむ。若し如來をして得想有りと計せ使めば、是則ち諸佛涅槃を得ず。得無きを以ての故に、涅槃を得と名づく。自在を以ての故に、一切法を得。諸法を得るが故に、名づけて大我と爲す。

七者、説自在の故に、如來、一偈の義を演説したまふに、無量劫を経て義も亦盡さず。所謂若しは戒、若しは定、若しは施、若しは慧なり。如來、爾の時に、都て念を生じたまはず、「我説き、彼聽く」と。亦復、一偈の想を生ぜず。世間の人、四句を偈と爲すを以て、世俗に隨ふが故に、説きて名づけて偈と爲す。一切法性も亦、説くこと有ること無し。自在を以ての故に、如來演説す。演説を以ての故に、名づけて大我と爲す。

八者、如來、一切諸處に遍滿すること、猶し虚空の如し。虚空の性、見るを得べからず。如來も亦爾なり。實に見るべからず。自在を以ての故に、一切をして見せしむ。是の如き自在を名づけて大我と爲し、是の如き大我を名づけて大涅槃と名づく。是の義を以ての故に、大涅槃と名づく。復次に、善男子、譬へば、寶藏に諸の珍異多く、百種具足せるが故に、大藏と名づくるが如く、諸佛如來の甚深の奧藏も、亦復是の如し。諸の奇異多く、具足して缺くること無ければ大涅槃と名づく。復次に、善男子、無邊の物、乃ち名づけて大と爲す。涅槃は無邊なり、是の故に大と名づく。

復次に、善男子、大樂有るが故に、大涅槃と名づく。涅槃は無樂なり。四樂を以ての故に、大涅槃と名づく。何等をか四と爲[ス]る。一者、諸樂を斷ずるが故に。樂を斷ぜざるは、則ち名づけて苦と爲。若し苦有らば、大樂と名づけず。樂を斷ずるを以ての故に、則ち苦有ること无けむ。無苦・無樂、乃ち大樂と名づく。涅槃の性は、无苦・、无樂なり。是の故に涅槃を名づけて大樂と爲。是の義を以ての故に、大涅槃と名づく。復次に、善男子、樂に二種有り。一者凡夫、二者諸佛なり。凡夫の樂は、无常敗壞なり。是の故に无樂なり。諸佛は常樂なり。變易[ヘンヤク]有ること無きが故に、大樂と名づく。

復次に、善男子、三種の受有り。一者苦受、二者樂受、三者不苦不樂受なり。不苦不樂、是亦苦と爲。涅槃も不苦不樂に同じと雖も、然に大樂と名づく。大樂を以ての故に、大涅槃と名づく。二者、大寂靜の故に、名づけて大樂と爲。涅槃の性、は大寂靜なり。何を以ての故に。一切憍闍[カイニョウ]^[註11]の法を遠離せる故に、大寂を以ての故に、大涅槃と名づく。三者、一切知の故に、名づけて大樂と爲。一切知に非ざるをば、大樂と名づけず。諸佛如來は、一切知の故に、名づけて大樂と爲。大樂を以ての故に、大涅槃と名づく。四者、身不壞の故に、名づけて大樂と爲。身、若し壞す可きは、則ち樂と名づけず。如來の身は、金剛にして、壞無し。煩惱の身、無常の身に非らず。故に大樂と名づく。大樂を以ての故に、大涅槃と名づく。善男子、世間の名字、或は因縁有り、或は因縁無し。因縁有りとは、舍利弗の、母を舍利と名づけ。母に因りて字を立つるが故に、舍利弗と名づくるが如し。摩躡羅[マユラ]道人の、摩躡羅國に生じて、國に因りて名を立つるが故に、摩躡羅道人と名づくるが如し。目犍連の、目犍連とは、即ち是姓にして、姓に因りて名を立つるが故に、目犍連と名づくるが如し。我の、瞿曇[クドン]種姓に生じて、姓に因りて名を立て、稱して瞿曇と爲すが如し^[註12]。

(13)

(503c05)是の大涅槃も亦復、是の如く、因縁有ること無きに、強ひて爲に名を立つ。善男子、譬へば虚空の、小空に因りて、名づけて大空と爲さざるが如き也。涅槃も亦、爾なり。小相に因りて大涅槃と名づくるにあらず。善男子、譬へば法有りては稱量すべからず、思議すべからざるが故に、名づけて大と爲す如く、涅槃も亦爾なり。

不可稱量・不可思議なるが故に、名づけて大般涅槃と爲すことを得。純淨を以ての故に、大涅槃と名づく。云何が純淨なる。淨に四種有り。何等をか四と爲[ス]る。一者、二十五有を名づけて不淨と爲。能く永く斷ずるが故に、名づけて淨と爲ることを得。淨、即ち涅槃なり。是くの如きの涅槃、亦有にして、是、涅槃と名づくることを得。實に是、有に非ず。諸佛如來、世俗に隨うが故に、涅槃有なりと説きたまえり。譬へば世人の、父に非ざるを父と言ひ、母に非ざるを母と言ふ。實に父母に非ずして、父母と言ふが如し。涅槃も亦、爾なり。世俗に隨うが故に、説きて諸佛、有にして大涅槃なりと言へり。二者、業、清淨の故に。一切凡夫の業は、不清淨の故に涅槃無し。諸佛如來は業清淨の故に、故に大淨と名づく。大淨を以ての故に、大涅槃と名づく。三者、身清淨の故に。身、若し無常なるを、則ち不淨と名づく。如來の身は、常なるが故に、大淨と名づく。大淨を以ての故に、大涅槃と名づく。四者、心清淨の故に。心、若し有漏なるを名づけて、不淨と曰ふ。佛心は、无漏なるが故に、大淨と名づく。大淨を以ての故に、大涅槃と名づく。善男子、是を善男子・善女人と名づく。是の如き大涅槃經を修行して、初分の功德を具足し成就すと。

大般涅槃經卷第二十三^[註13]

(14)

(511a24)善男子、譬へば病人の、醫教及び藥の名字を聞くと雖も、病を愈すこと能はず、服食するを以ての故に、能く病を差すを得るが如し。十二の深因緣法を聽くと雖も、一切煩惱を斷ずるを得ること能はず、要ず念を繋けて善く思惟するを以ての故に、能く除斷するを得。是を第三の繋念思惟と名づく。復、何の義を以て、繋念思惟と名づくるや。所謂三三昧、空三昧、無相三昧、無作三昧なり。空者、二十五有に於て一つの實を見ず。無作者、二十五有に於て、願求を作さず。無相者、十相有ること無し。所謂色相・聲相・香相・味相・觸相・生相・住相・滅相・男相・女相なり。是の如きの三三昧を修習すれば、是を菩薩の繋念思惟と名づく。

云何が名づけて如法修行と爲す。如法修行とは、即ち是、檀波羅蜜乃至般若波羅蜜を修行するなり。陰入界眞實の相を知り、亦聲聞・緣覺・諸佛の一道を同じうして、而も般涅槃するを知る。法とは、即ち是、常・樂・我・淨、不生・不老・不病・不死・不飢・不渴・不苦・不惱・不退・不沒なり。善男子、大涅槃甚深の義を解する者は、則ち諸佛の終に畢竟して涅槃に入らざるを知る。

善男子、第一眞實の善知識は、所謂[イハユル]菩薩・諸佛なり。世尊、何を以ての故に。常に三種の善調御を以ての故なり。何等をか三と爲[ス]る。一者、畢竟軟語、二者、畢竟呵責、三者、軟語呵責なり。是の義を以ての故に、菩薩・諸佛、即ち是、眞實の善知識也。復次に、善男子、佛及び菩薩を大醫と爲るが故に、善知識と名づく。何を以ての故に。病を知りて藥を知る、病に應じて藥を授くるが故に。譬へば良醫の善き八種の術の如し。先ず病相を觀す。相に三種有り。何等をか三と爲。謂く、風・熱・水なり。風病の人には、之に蘇油[ソユ]を授く。熱病の人には、之に石蜜を授く。水病の人には、之に薑湯[キョウトウ]を授く。病根を知るを以て、藥を授くるに差[シャ]することを得。故に良醫と名づく。佛及び菩薩、亦復、是の如し。諸の凡夫の病を知るに三種有り。一者、貪欲、二者、瞋恚、三者、愚癡なり。貪欲の病には、教えて骨相を觀ぜしむ。瞋恚の病には、慈悲相を觀ぜしむ。愚癡の病には、十二緣相を觀ぜしむ。是の義を以ての故に、諸佛・菩薩を善知識と名づく。善男子、船師の、善く人を度すが故に、大船師と名づくるが如し。諸佛・菩薩も亦復、是くの如し。諸の衆生をして、生死の大海を度す。是の義を以ての故に、善知識と名づく。復次に善男子、佛、菩薩に因りて、諸の衆生をして、具足して善法の根本を修得せしむるが故なり。善男子、譬へば雪山は、乃ち是、種種微妙上藥の根本の處なるが如く、佛及び菩薩も亦復、是の如く、悉くは一切の善根本の處なり。是の義を以ての故に、善知識と名づく。

善男子、雪山の中に、上香藥有りて、名づけて娑呵と曰ふ。人有りて之を見れば、壽無量にして病苦有ること無きことを得。四毒有りと雖も、中傷すること能はず。若し觸るる者有れば、壽命を増長して百二十を滿ず。若し念ずる者有れば、宿命智を得。何を以ての故に。藥の勢力の故なり。諸佛・菩薩も亦復是の如し。若し見る者有れば、即ち一切煩惱を斷除することを得。四魔有りと雖も、干亂すること能はず。若し觸るる者有れば、命、夭[ヨウ]す可からず、不生・不死・不退・不沒なり。所謂觸とは、若しは佛邊に在りて、妙法を聽受し、若しは念ずる者有れば、阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。是の義を以ての故に、諸佛・菩薩を善知識と名づく^[註14]。

(15)

(514c08)善男子、涅槃を名づけて大涅槃に非ざる有り。云何が涅槃にして大涅槃に非ざる。佛性を見ずして而も煩惱を斷ず。是を涅槃にして大涅槃に非ずと名づく。佛性を見ざるを以ての故に、無常・無我にして、惟、樂・淨のみ有り。是の義を以ての故に、煩惱を斷ずと雖も、名づけて大般涅槃と爲すを得ざる也。若し佛性を見て能く煩惱を斷ずれば、是則ち名づけて大涅槃と爲す也。佛性を見るを以ての故に、名づけて常・樂・我・淨と爲すを得。是の義を以ての故に、煩惱を斷除するを、亦稱して大般涅槃と爲すを得。善男子、涅槃者、不と言ひ、槃者、織と言ふ。不織の義を名づけて涅槃と爲す。槃は又覆と言ふ。不覆の義、乃ち涅槃と名づく。槃は去來と言ふ。不去不來、乃ち涅槃と名づく。槃者、取と言ふ。不取の義、乃ち涅槃と名づく。槃は不定と言ふ。定にして不定無きは、乃ち涅槃と名づく。槃は新故と言ふ。新故無きの義、乃ち涅槃と名づく。槃は障礙と言ふ。無障礙の義、乃ち涅槃と名づく。善男子、憂羅迦、迦毘羅の弟子等有りて言はく。「槃者、相と名づく。無相の義、乃ち涅槃名づく」と。善男子、槃とは有と言ふ。有無きの義、乃ち涅槃と名づく。槃とは和合と名づく。無和合の義、乃ち涅槃と名づく。槃とは苦と言ふ。無苦の義、乃ち涅槃と名づく。善男子、煩惱を斷ずる者は涅槃と名づけず。煩惱を生ぜざるを、乃ち涅槃と名づく。善男子、諸佛如來は、煩惱起らず、是を涅槃と名づく。所有の智慧、法に於て無礙なり。是を如來と爲[ス]。如來は是、凡夫・聲聞・緣覺・菩薩に非ず。是を佛性と名づく。如來は身心智慧、無量無邊阿僧祇の土に遍滿したまうに、障礙する所無し。是を虚空と名づく。如來は常住にして變易[ヘンヤク]有ること無ければ、名づけて實相と曰う。是の義を以ての故に、如來は實に畢竟涅槃にあらざる、是を菩薩と名づく^[註15]。大涅槃微妙經典を修し、第七功德を具足し成就す。復次に善男子、云何が菩薩摩訶薩、大涅槃微妙の經典を修し、第八功德を具足し成就する。善男子、菩薩摩訶薩、大涅槃を修して、五事を除斷し、五事を遠離し、六事を成就し、五事を修習し、一事を守護し、四事に親近し、一實に信順し、心善解脱し、慧善解脱す。

(16)

(515a29)云何が菩薩、一事を守護す。菩提心を謂ふ。菩薩摩訶薩、常に勤めて是菩提心を守護すること、猶し世人の一子を守護するが如く、亦、瞎者の餘の一目を護るが如し。曠野を行くに、導者を守護するが如く、菩薩、菩提の心を守護するも、亦復是の如し。是の如き菩提心を護るに因るが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得。阿耨多羅三藐三菩提を得るに因るが故に、常・樂・我・淨、具足して有り。即ち是、無上大般涅槃なり。是の故に、菩薩は一法を守護す。云何が菩薩、四事に親近する。四無量心を謂ふ。何等をか四と爲す。一者、大慈。二者、大悲。三者、大喜。四者、大捨。是の四心に因りて、能く無量無邊の衆生をして菩提心を發さ令む。是の故に、菩薩、心を繋げて親近す。云何が菩薩、一實に信順する。菩薩は、一切衆生をして皆一道に歸せしむと了知するなり。一道者、言く大乘也。諸佛菩薩、衆生の爲の故に、之を分つて三と爲す。是の故に、菩薩、不逆に信順すと^[註16]。云何が菩薩、心善く解脱する。貪・悲・癡の心、永く斷滅するが故に、是を菩薩の心善解脱と名づく。云何が菩薩、慧善く解脱する。菩薩摩訶薩、一切法に於て知りて障礙無き、是を菩薩慧善解脱と名づく。慧解脱するに因りて、昔聞かざる所を、今聞くことを得、昔見ざる所を、今見ることを得、昔到らざる所に、今到ることを得。爾の時、光明遍照高貴徳王菩薩摩訶薩の言さく、「世尊、佛の所説の心解脱の如きは、是の義、然らず。何を以ての故に。心本、繋無し。所以は何ん。是の心の本性、貪欲・瞋恚・愚癡の諸結に繋せられると爲さず。

註

[註1] 「善友より先なるは無し」(国訳一切經)とあるが、宗祖は、「善友を先とするには无[シ]かず」と読みを付けておられる。これは、すぐ後に、「是の故に近因は、善友に若くはなし」(国訳一切經)とあるが、宗祖は、「是の故に、日に近づきになり。善友に若くことなかれ」と読みを付けられている。いずれにしても、一切衆生が、阿耨多羅三藐三菩提に近づく因縁は、善友に及ぶものはない、という意味を表しているものと考えられる。

[註2] 「海に入り、火に遇ひて死し」(国訳一切經)とあるが、宗祖は、「海邊に入りて、災して死ぬ」とされるが、頭註に、「或本」火に遇ふ」とある。「邊」と「遇」、「災」と「火」との相違がある。

[註3] 「衆罪の滅することを得たる」(国訳一切經)とあるが、宗祖には、「衆罪消滅しぬ」とある。「得」と「消」の相違。

[註4] 「猶未だ審定せず。汝、來れ、耆婆、吾、汝と同じく一象に載らむと欲す」(国訳一切經)とするが、宗祖には、「猶未

だ審[アキラカ]ならず。定んで、汝、來れり。耆婆、吾、汝と同じく一象に載らむと欲う」(坂東本)とある。

[註5] 「捉持して」(国訳一切経)とあるが、宗祖には、「投持して」(坂東本)とある。

[註6] 「大王、若し侍臣に「立たば王の首を斬れ」と勅せんに、坐する時乃ち斬らば、猶罪を得じ。坐する時乃ち斬らば、猶罪を得じ。」(国訳一切経)とするが、宗祖には、「大王、若し侍臣に勅せましかば、立ちどころに王の首を斬らまし。坐の時に乃ち斬るとも、猶罪を得じ」(坂東本)とある。

[註7] 「我、今遊獵して得ざる所以は、正しく此の人の驅逐して去らしむるに坐す」(国訳一切経)とするが、宗祖には、「我、今遊獵す。所以[コノユエ]に、正しく坐すことを得ず。此の人、驅[カ]りて遂に去ら令む」(坂東本)とある。

[註8] 「是の王是の如く、尚輕受を得て、地獄に墮せず」(国訳一切経)とあるが、宗祖には、「先王、是の如く尚、輕く受くことを得て、地獄に墮ちず」(坂東本)とある。

[註9] 「王の「父王辜無し」と言う所の如きは、大王云何が無しと言ふ。夫罪有る者は則ち罪報有り」(国訳一切経)とあるが、宗祖には、「王の言ふ所の如し、父の王、辜無くば、大王、云何ぞ、失[トガ]無きに罪有りと言はば、則ち罪報有らん」(坂東本)とある。

[註10] 「我今、佛を見たてまつる。是の佛を見て得る所の功德を以て、衆生の有らゆる一切煩惱惡心を破壊す」(国訳一切経)とあるが、宗祖には、「我、今、佛を見たてまつる。是、佛を見たてまつり得る所の功德を以て、衆生の煩惱惡心を破壊せしむ」(坂東本)とある。

[註11] 坂東本に、「憤闘」に字に、右に「クワイ ネウ」の読みあり、左訓に「イツワル イツワル ワロキコトナリ」とある。

[註12] 「真仏土卷」に引かれている。常・楽・我・淨の四法のうち、楽を説く段である。

[註13] 常・楽・我・淨の四法のうち、淨を説く段である。

[註14] 「化身土卷」に引かれている。菩薩・諸佛が眞實の善知識であることを明かす。

[註15] もともとは、「是を菩薩大涅槃微妙經典を修して、第七功德を具足し成就すと名づく。」(国訳一切経)と読むべきところ、宗祖は、「是を菩薩と名づく。」で切って、後の「修大涅槃微妙經典、具足成就第七功德。」を切り捨ててしまわれた。ここで、その故に、經に、前言として、「諸佛如來、煩惱起こらず、是を涅槃と名づく」とあった言葉と、今ここに、「如來は實に畢竟涅槃にあらざる、是を菩薩と名づく」とは、矛盾してしまうのではなからうか、という疑問が起こる。しかし、そうではなく、「如來は是、凡夫・聲聞・緣覺・菩薩に非ず」という言葉があるように、如來と菩薩の位相の違いを明らかにする言葉と解される。

[註16] 「行卷」に引かれている。「行卷」一乗海積には、經文証として、『涅槃經』から、3文が引用されている。いずれも、大乘は一乗であることを証する文であるが、「一実」「一道」という語が見られ、他力回向としての行が明らかにされているのである。